

青い絨毯

坂口安吾

青空文庫

僕らが「言葉」というほんやく翻譯雜誌、それから「青い馬」という

同人雜誌をだすことになって、そのへんしゅう編輯に用いた部屋は芥あくた

川がわりゆうのすけ

龍之介の書齋であった。というのは、同人のくずまきよしとし葛巻義敏

が芥川の甥おいで、彼はそのころ二十一、二の若年だったが、芥川

死後の整理、全集出版など責任を負うて良くやっております、同人雜誌の出版に就つても僕らの知らないことに通じていて、彼が主としてやってくれたからである。当時は芥川の死後三年目であった。

芥川の家は僕の知る文士の家では最もましな住家だけでも、中流以上の家ではない。和風の小ざっぱりとした家で、とりわけ金をかけたと思われる部分もなく、特に凝った作りもない。僕の

知るのは二階二間ふたまたと離れの書齋二間と座敷二間、それから庭だけ、家族の居間は知らない。日当りの良い家だけれども、なぜか陰気で、死の家とはこんなものかと考え、青年客気のあのころですら、暗さを思うと、足のすすまぬ思いがしたものである。

僕の生れた新潟の家は昔坊主の学校で、だからお寺のような建築であった。おまけに一一ふたかかえ抱みかかえから三二抱みかかえぐらいの天然の松林の中にあって、ろくろく日の目を見ることが出来ず、鴉からすと梟すくろの巢うであつた。坊主の一人が屋根裏の梁はりに首をくくつて死に、その部分だけ一間けんぐらい切りとつてある。この屋根裏は女中部屋だが、子供の僕は坊主のお化けが出るなどとおどされながらも梁から梁を渡つて歩いて、あの建築に就て一向に暗い印象を持たないのであ

る。

牧野信一の自殺した小田原の家、あの家にも暫く泊っていたことがある。お寺の隣で、前後左右墓地を通りぬけて出入するとう家であり、彼が首をくくった子供部屋は三畳ぐらいの板敷きの日当り悪い陰気な部屋だが、一向に「死の家」という感じは残らぬ。

それらの家に比べれば、芥川家は高台の日当りの良い瀟洒な家で、屋根裏、病的、陋巷、凡そ「死の家」を思わせる条件の何一つにも無関係だが、僕にとっては陰鬱極まる家であった。葛巻の起居していた二階八畳の青い絨毯など特に僕の呪つたもので、あの絨毯の陰気な色を考えると、方向を変えて、ほかの

所へ行きたくなつてしまつたものだ。この絨毯は、僕の記憶に誤りがなければ、芥川全集の最初の版の表紙に用いた青布の残りで、部屋いっぱい敷きつめると、汚れたような黒ずんだ青だ。実に陰鬱な絨毯だ、よしたまえよ、と言つて、あの頃も頻りに呪つて、でも君、葛巻少年、實際彼は少年貴族という感じであつたが、そういう時には急にクスリと老人のような笑い方をして言葉を濁す習慣であつた。彼の好きな絨毯であつたに相違ない。そして、生前の芥川には一切無関係の絨毯であつたと思う。

この部屋には、違い棚の下にガス管があり、叔父おじ（芥川のこと）がこのガス管をくわえて死にかけていたことがあつてネと葛巻が言つていたが、なぜか僕は死んだあるじにひどく敵意をいだいて

いて、この自裁者の心事などには一向に思いを馳せていなかった。又、この部屋では、芥川の遺稿を読まされたこともある。この遺稿は数年後、再読したときに驚嘆した未完の小品で、この作品に就てはすでに二度僕の感想を発表したが、当時は全然わからなかった。否、旺盛な敵意によつて、ろくろく目も通さず押し返して、つまらないと断言したのを覚えている。

この部屋では、よく徹夜した。実にくだらなく徹夜した。こんな下らない原稿ばかりで雑誌をだすのは厭だと言いだすのは葛巻で、いいじゃないか、人の原稿は下らなくても、自分だけ立派な仕事をすればよい、同人雑誌はそういう性質のものだと言つて、年中二人で口論する、葛巻は文学的名門に生育した人であるから、

自分が編輯にたずさわる以上くだらぬ原稿はのせられぬという誇りを放すことができぬ。もう印刷所へ原稿が廻まわしてあり、校正がでている最中にすねはじめて、あしたまでに何か書いて頂ちようだい戴よ、とか、之これを翻譯して頂戴よ、とか、じゃ君自身書きたまえ、ウン僕も書くけどさ、弱々しく笑いだされると仕方がないので、二人でよく徹夜して原稿を書いた。葛巻という人は、こういう時に、たった一夜で百何十枚という小説を書く、破りすてて結局一作も発表はしなかったが、実際一夜に百枚二百枚という信じられない書き方をする。毎日丹念に短篇を書いた叔父とは全く似ていなかった。僕も仕方なく翻譯にとりかかって、たった一夜にいくつかが相当厚味のある原書を訳してしまったものだ。ジツドの「ワ

イルドの思い出」という本も三日ぐらいで全部訳してしまったし、マリイ・シエイケビツチ夫人という有閑マダムの「プルウストの思い出」この本も一夜で訳した。尤も、一冊の本ではあるが、有閑マダムの豪華本であるから、全訳して三十枚ぐらいのもの。何分僕は大してフランス語はできないところへ、一晚という時間であるから、辞書をひかぬ、分らぬところは面倒くさい飛ばしてしまえ、というわけで、諸所に五行ぐらいつ飛ばしたところもある始末で、「プルウストの思い出」でも、プルウストの好きな献立の半分ぐらい料理の名前や原料に知らない言葉がでてきたので、此奴面倒と飛ばしてしまった。無責任なことをしたもので、僕の翻訳を読んだ人はプルウストという男は随分皿数の少い宴会をひ

らく奴だと思ひこんだであろう。ヴァレリーの「ヴァリエテ」などの幾つかもこうして翻譯したものだから、分らぬところはみんな抜かず、結局あの晦^{かい}渋^{じゆう}な原文が、僕の手にかかると明快至極なものになり、原文を知らない人々が讚嘆したものであるが、分らぬ所を抜くのだから明快流麗、無茶な話であつた。翻譯をほめられる度^{たび}に困つた思ひをしたものである。

いつたい徹夜というものは壮年健康な時ほど疲労が劇^{はげ}しいようである。近頃は徹夜をしてもさのみ疲れを覚えず徹夜を生活の一部に心得てしまつてゐるが、あの頃の疲労はひどかつた。事実本を一冊訳しあげるようなワキ目もふらぬ緊張のせいもあつたであらうが、顔に表れる憔悴^{しょうすい}が顕著で、目はくぼみ、顔全体が

脂あぶらでギラギラ皺しわだらけで黄色であった。ウサギ屋のモナカを食い濃い珈琲コーヒーをよく呑んだ。そうして朝は大概カレーライスライスの食卓だったことを忘れない。食しょくよく慾よくなどは殆どほとんどなかった記憶である。

僕は徹夜を呪った。葛巻がすねはじめると、僕は怒気満々、食しょくよくってかかる勢いで口論になるのであったが、葛巻は女性のように柔らかな病弱にも拘かかわらず、自説の執着に至いたっては話の外ほかで、おだやかな言い方と、弱々しい微笑と、持もって廻まわった表現で、最後の最後まで食いさがる。結局僕の根負けであった。尤も、葛巻の主張の方に多くの道理があつたのだらう。なぜなら僕らの原稿が下らないという彼の説は正しかったし、彼の野心に邪念が少い。というのは、彼は有名な文士になりたいなどは考えず、良い雑誌を

だしたいということ専一に考えていた。彼はある令嬢を熱愛して、それが生活のほぼ全部であり、そのほかにも別の希いがあるとするれば、三、四の名流婦人に好かれたという名家の少年らしい願望であつた。良い雑誌はいわば彼の身だしなみの一つであり、どうしても「良い」雑誌でなければならぬ。下らぬ原稿があつては困る。彼の気風心事は王朝さながら、之に対する僕の心事に至つては粗放蕪雜、野武士の心事の如くである。天下に名を為したといふことだけで目がくらみ、自家の菲才浅学の如きを恬として念頭におきたがらぬ。この家の自殺したあるじに本能的な敵意を懷いてしまったのも、たまたまあるじの書齋を本拠としたために世人の買い被りを受けたような風説となり、あたら槍一筋の

手柄に傷をつけては残念だという向う見ずな意気込みによるものであつた。

己れの愛情に就て葛巻は至極率直で、この愛情は一方的な片思いにすぎないのだが、葛巻は万事友人に隠しておらぬ。ただ令嬢に向つてだけ打聞けることができないという気の毒なものであつた。だから、良い雑誌によつて身を飾りたい、あわよくば、それによつて令嬢の心を惹く^ひ一助ともしたい、という願望は純一無垢^{むく}で、原稿の良非に対する追求は邪念がない。ところが僕らは全くの野武士で、拾い首をしてでも立身出世がしたいという根性であるから、純粹な批判によつては不良品でも、商品として通用し、むしろ営利的に成立ち得るような作品だったら、その方がいいじ

やないか、というような良からぬ思いを蔵している。さすがにそれを表向きふりかざすわけにも行かないので、あれやこれや持つて廻つて言い廻しているが、心底をわれば、君はそういうけれども、案外こんな作品が受けやしないかというサモしい性根が本心だ。

編輯に当るのは葛巻と僕で、時には詩人の本多信が加わることもあつたけれども、大体同人全体は野武士の心を持つている。だから僕が何かにつけて有利のようだけれども、有りていはそうではないので、何と云つても葛巻の純粹な立場には千鈞せんきんの重味があるのである。野武士の僕といえども少年期をすぎたばかりの多感な年頃であるから、曇りなきものに打たれる素直な心を失つて

はおらぬ。葛巻の道理に勝てないものが必ず残り、常に心中無念であつた。

ふと昔を思いだす。二十の年、二十五の年、三十の年。京都伏見^{しみ}の弁当仕出し屋の二階に住んでいた頃は最も太平楽、利根川べりの取手^{とりで}にいた時は水だけ飲んで暮さねばならないことが時々あつたが、その思い出も楽しいものだ。あと八銭しかない、一週間は金のはいる見込もない、という時に、八銭でソバを食うべきか、タバコを買うべきか、と深刻なる難関に逢^{ほう}着^{ちやく}する。幾度かあつたが、結局タバコを買うもので、最後の金でウドンを食つたという記憶は一度もない。後日同好の士に訊^きき合せてみるに、結局タバコを買う方が共通の心事のようである。

だが伏見でも苦しい病気の思い出があつた。このとき葛巻に助けられたので今歴々思いだしたが、まだ弁当仕出屋の二階に移らぬ前に、火薬庫の前の計理士の二階を借りていたことがあつた。

僕が京都に住んだのは、一切友人を離れ、本当に孤独というものを底の底まで突きつめてやれ、という一時の気まぐれに発した移住であつたが、計理士の二階で病気になつた。背中の手だけは辛^{かろう}じてとどくけれども絶対に見ることの出来ぬ場所に腫^はれ物^{もの}ができ、構わずにおくと、一ヶ月目ぐらいにだしぬけに高熱がでて、目はくらみ、耳は唸^{うな}り、苦痛のために身体をエビの如くに曲げてみるも冷^{ひやあせ}汗が流れ、自然のたうちまわつて、まったく意識せずして唸り声を発してしまう。

あいにく月末で、僕自身いちもん一文の金もないのみならず、宿主の計理士が月末の例によつて行方ゆくえをくらませてしまった。彼は常に月末になると行方をくらます習慣で、自然僕が借金取の応待をせざるを得ぬ立場になる。借金取と言っても、事實は家主、八百屋やおや、電燈、水道、そういう当然なる料金の類い。この計理士は五十がらみの年齢に似もやらぬ少年詩人の如き気分屋で、ええ天気やさかい仕事してられえへんどすわと言つて大概のお天気の日は外出し、酒も飲まず女遊びもしないけれども、仕事の期日に遅れるために顧客も失い貧乏もするという様子である。細君と別居して自分はこの事務室階下に（階上は僕）ヤモメ暮しをしており、一人ぐらしは清々といえどすわと述懐していたが、先生（僕のこと）

ウチに気兼ねせんと、ええ人云々うんぬんということをするだけの雅量を失わぬ通人でもあつた。だから、月末になると姿を消す。

一週間ぐらひは雲隠れで、之には僕も参つたけれども、他人の借金と言訳というものは極めて気楽でさしたる苦勞でもなかつたから、僕もとりわけこだわらず、雲隠れを咎とがめだてたことは一度もなかつた。又、この男は五十ぐらひの年にもなり鼻下にヒゲなどというものまで貯えているくせに、ちよつとのことで赤面してマツカになつてしまふという奇妙な好人物であつた。

けれども、身動きならぬ病中に行方をくらまされた時には全く参つた。とはいえ借金の言訳が苦痛だというわけでもない。なぜと云うに、こういう劇烈な病苦になると、世に孤独ほど呪うべき

ものがなくなってしまう。道を通る一人の人のあしおと足音ですらなつかしい。さらに最もやりきれぬのが夜であり、あの暗闇くらやみであり、あの静寂だ。夜の電燈は僕のイノチで、この光が消えたなら僕のイノチも消えてしまう。僕の窓の正面に火薬庫があり、崖がけの上を銃剣さげてグルグル廻る番兵の姿が見えるが、病中僕の幻覚はこの火薬庫へ忍びより忽たちまち銃剣に追いつめられてとたんに火薬庫が爆発する、はじかれて我に返れば全身の苦痛で、腹はらば這いになり、エビの如くに身をちぢめ、呼吸のかぎり唸りをひく。夜が明けてくれ。窓の下を誰か人が通ってくれ。誰でもいい、誰か来てくれ。希うことはそれ一つ。借金取の訪れでもよかった。戸が開く。借金取の音がする。アア助かった、嘘うそではないのです、まったく恋

人の訪れの如くイソイソと、とはいえ階段を一足降りるにもアルプスの崖をつまぐるていたらくで齒をくいしぼり、四這いになって一足一足降りて行く。ただなつかしきで一杯だから、借金取のふくれツ面に向い合うと親愛の微笑が自然に浮び、歌うように借金 of 言訳をのべたてることのたのしき。病中唯一の慰めはただそれだった。けれども、電燈の集金人がイキリ立って、電燈をとめてしまうといきまきはじめて時には驚いた。夜の光はイノチなのだ。之を消されてどうして生きていられよう。必死であった。僕が払う。何を売っても必ず払う。一週間だけ待ってくれ、とはいえ全く集金人が憎くはない、彼が訪う人であるというばかりでなつかしきには変りがないから、必死に叫ぶ僕の声がやっぱり歌声

の如くたのしかつた。借金取がひきあげ、戸が閉じ、登音が去る。はりつめた力がぬけて板の間へへタへタ倒れ、暫くはしばらくままったく意識がなくなってしまう。電燈の集金人がともかく一応了解して引上げたあとでは、板の間の上に気を失って、僕は自然に泣いていた。気がついたとき板の上に一握の涙がたまっていて、昔、涙で鼠ねずみを書いた絵描きの子僧がいたというが、僕の方は一一の字をひっぱるだけの力もなかつた。

ともかく医者にかかってみようと決意して、このとき葛巻に電報を打った。どういう風にして料金をつくり、どういう風に歩いて電報を打ったかという大事なことが全然記憶にないのである。ところがこの返電が早かつた。待つ身のつらさというが、予期し

得ぬ早さのうちに電報為替がとどいた時の喜びは忘れられぬ。始め僕は葛巻から為替がとどいたとして、いつたい郵便局まで歩くことができるだろうかということ甚だ不安に思っていた。ところが電報為替がとどく。そのよろこびの為ためばかりで勇氣は忽ち百千倍、郵便局まで歩くばかりか駈かけだすことすら出来そうな起死回生の有様である。

尚な又お一層馬鹿なことには、まったく馬鹿ゲタ話である。為替を握なつて家をでる、十間けんぐらい歩いたところで、坂口さん、僕を呼びとめる男に会った。三宅勇蔵である。この春大学を卒業し、京都のJO撮影所の脚本部員となり、僕を訪ねてきたのであった。窓下を通る人の登音きたすらなつかしかつた僕である。友来きたる。ああ

友遠方より来る。夢の如くであつた。酒を飲もう。共に盃さかずきをあぐる日、かかる日の再びあるべきや。酒をのんだ。まことに不思議な酔い方をした。全身に泥がしみわたり泥細工ぬの濡れ人形に化したような奇怪な感覚がしみ通る。泥酔でいすいの極に達し、一夜に医療費を飲みあげて意気高らかに家に帰り、あの怖おそるべき寢床に怖れ気もなくひっくり返り、電燈などが何じやいと此奴もパチンと消してしまつて悠々と眠り、目が覚めると、不思議不思議、一夜のうちすなわに全く熱が去り、突然病気が治つていた。微塵みじんも嘘ではないのです。即ち、一夜のうちすなわに腫物はれものが破れ、自然に膿うみが流れでたのだ。尤もその後の五ヶ月ほど膿がとまらなかつたけれども、痛みはこの日を境にして拭ぬぐい去られてしまつたのだ。

万事偶然の成行だったが、然し、極めて理想的に病気を退治た
ということが出来る。なぜなら、後日、三好達治の背中に拳こぶしに余
る傷跡を見たからで、彼も同じく腫物を病み、手術をした。手術
の途中に気絶したということで、手術後の半年間苦しんだ。その
傷跡は腫物の跡の如くではなく、大砲の破片を受けてそれを引抜
いた跡の如くに壮烈である。僕のやり方が遥はるか無難であったのだ。
けれども、こういう思い出も今となってはただなつかしいばか
りである。貧乏の苦、恋の苦、うしとみし世ぞ今はこの昔の和
歌の通りである。

ところがここにただ一つ、明るさ、なつかしさの伴わぬのが、
芥川の書齋ですごした青春多感の年月であった。あの頃は貧乏の

苦もなかった。恋情に瘦^やせる思いをしたということもない。希望と若さに溢^{あふ}れ、怖れや妥協にまみれることも尠^{すくな}く闊^{かっ}歩^ぽしていたではないか。ただ葛巻の正論には最も参った。表面に弱身のみせぬ僕であるから内心最も圧倒されていたのだけれども、それは単に理窟^{りくつ}の上の話であり、葛巻の芸術に圧倒されたわけでもなければ、わが芸術に自信を失う、絶望した、ということと全然意味が違っている。この時期は、まさしく僕の若さの時、希望の時、伸びようとする力だけの時期だった。

けれども思えば、この時期のあの姿、あの部屋、あの道、あの言葉、なぜか思いだす全てに暗さばかりがつきまとうてくる。まるで、若さは暗い、というかのよう。事実、或いは青春は暗い

ものであるかも知れぬ。青春には病的自体も健康であり、暗さ自体健全なのだ。けれども、あの希望にみちた時期に、なぜ太陽をふり仰ぎ青空をいっぱいにあびている思いがぬけ落ちているのだろうか。僕はいつも暗い路を歩みちいている。その路は芥川の書齋へ通う路なのだ。暗い部屋で葛巻と対坐している。ペンを握り翻訳している。あの部屋は日当りの良い部屋だった。クツキリと青空も見え、絨毯に冬日がさやかに射さしこみ、徹夜の朝の澄んだ夜明けもあったのに。

あれは全く死の家だよ、僕は痛烈に芥川家を呪ったものだ。まったくだよ、こう答えるのは長ながしまあつむ島萃むで、冷やかすようにニヤニヤあとは無言、あいつは何を考えていたのだろう。雑誌の同人

はちよくちよく芥川家へやってくるが、あいつばかりは殆んど姿を現すということもなく、そのうち芥川よりも、もつとハツラツと自殺して死んでしまいやがった。

君は知らないだろうけど、あのウチときたら、下の座敷へ降りると、登音のないお婆さんばあがいつも立っていたり、歩いていたり、しているんだぜ。せいが馬鹿に高くて肩幅のひろい角力すもうの瘦せたようなお婆さんなんだ。そのお婆さんが一人かと思うと、たしかに二人なんだね。嘘のことがあるものか。たしかに二人だ。そのくせ俺おれは登音をきいた覚えがありやしない。こういう風に僕は長島に言うのである。ワツハツハと彼は笑って無言である。便所から出たら登音のないお婆さんがカモイの下を歩いて行ったよ、葛

巻はニヤリと笑って之も無言。この絨毯燃しちやったらどうだろうね。だって、君、君ったら、どうしてこの絨毯が厭なんだろうね。

葛巻はカリエスで肋膜ろくまくが悪くそのレントゲン写真を僕がひっくり返って眺めていると彼は頬杖ほおづえをついて、どう？ なんだか厭でしょうとニヤリと笑う。毎日致死量に近いぐらいのカルモチンをのみ、少年貴族の顔は黄色く濁って皺だらけだ。カルモチン止よしたらどうかね。だって眠れないもの。眠れる人は幸福よ。馬鹿馬鹿しい話だよ。叔父さんの亡霊にすぎないのさ。叔父さんと縁を切るのだよ。バツサリと。じゃ眠らせて下さいよ。少年貴族は爽さわやかに笑うのである。

芥川は自殺したけど、だいたい自殺などというウチじゃないのだね。誰かがあのウチで殺されている。短刀とかピストルというものが投げだしてあって、それで君、犯人なんか必要ないよ。だいたい、そういうウチなんだ。いつだって青空から隠されているよ。僕は又こういう風に長島に言う。彼は又腹をかかえて大笑い。

要するに長島は、僕という蕪雑な男はそういう風な困り方をする男で、死の家の暗さなどという妙なものを、デタッチあげて独りで参つてよろこんでいる、要するに一つのポーズだ。尤もフロイド風に分析すれば持つて廻った底の方に謎を解く鍵かぎもあろうけれども、ポーズの方が重要ななのさ、と思ひこんでいたかも知れぬ。

僕自身僕のポーズに眩惑げんわくされる傾向もたしかにあるが、正し

く敬虔けいけんなる心に於おいて、あの家は暗い家だと僕はやっぱり判定する。笑うなかれ。少女の祈りの如き幼い心が今なお僕の心に少しく宿り、その言葉が、あの家は暗い家だと言っている。葛巻は暗くない。芥川家は暗くない。住む人々も暗くない。婆さんに躑音がぶしつげないよなどとはまこと無礼なる悪表現で僕の無ぶしつげ躑げなポーズのせいに他ならぬ。要はあの時期が暗いのだ。

少年の希望のなんと暗くあることよ。貧乏の苦も、恋の苦も知らず、多くの汚けがれを知らず、ただ人生の重さだけを嗅かぎ当てている。希望に燃え、虚名にあこがれ、成功を追いながら、死の正しい意味を知る者はただ青春のみ。最も希望のない時期だ。そういうことも言えると思う。

そういう時期の一日、暮方駿河台^{するがだいした}下の道を一人歩いていると、レンコートの青年によびとめられた。見覚えがあるかときくので無いと答えると、そうでしょう、僕のような平凡な男がお目にとまる筈はないのです。僕の一生など僕には分りすぎる程よく分っているのです。安サラリーマン、右にも左にも動く筈がないではありませんか。まだしも失業していないだけが不思議です。あの頃は青年の半分ぐらいが失業している時代であった。

十分か十五分だけ一緒にお茶をのむ時間を与えてくれ、と言うので、手^て近^ぢかな茶店で休んだのだが、彼がだしぬけに言いだした言葉は、あなたには美しい令嬢達のお友達が数えきれないほどお有りでしょうね。そうして、その令嬢達がみんなあなたに思いを

かけているに相違ないことも知っています、という途方もない言葉であつた。この男はそれを信じこんで返答の余地もない有様であつた。あなたのように聡明そうめい闊達かつたつ王者のような青年紳士に無数の美しいお友達が出来るのは当然で、自分はアテネフランセの末席から、あなたのようになりたいということをも考えていた。偶然一人でいらつしやるのを見かけたので思わず呼びとめてしまったけれども、こうして十分か十五分一緒にお茶をのんでいただく光栄だけで充分なので、決して令嬢の一人に紹介してはだきたいなどということは考えていない。令嬢達が僕などに注意を向ける筈が有り得るものではないのですから、と言つて、彼は一人で喋つて、そそくさと立去たちさつてしまった。尤もこの男はまる

でソファアにふんぞりかえるように坐つて、腕組みをして煙草をふかして威張り返つて天井を睨にらみながら、甚だ自卑的なことをまくしつづけていたのである。

奇妙な話があるものだ。僕には美しい令嬢の友達などは一人もなかつた。僕のことをこんな風に考えている人が有るといふのは不思議であつたが、要するに世の中はこんなものであらう。誰一人思い通り、望み通りの生活などをしていない人はいないので、みんな他人が幸福だと思つているだけ。

葛巻なども多くの人々に最も幸福な人よと思われていたに相違ない。その葛巻は痩せる思いで令嬢に恋こいがれ致死量に近いカルモチンをガブガブのんで辛かろうじて眠りをとつている。世はままな

らぬものである。先年葛巻が結婚のとき、結婚記念にあの絨毯を燃しちやいなさいと手紙を書いたが、この手紙はどうとう出しそこなつてしまった。

青空文庫情報

底本：「風と光と二十の私と・いずこへ 他十六篇」岩波書店、
岩波文庫

2008（平成20）年11月14日第1刷発行

2013（平成25）年1月25日第3刷発行

底本の親本：「坂口安吾全集 15」筑摩書房

1999（平成11）年10月20日初版第1刷発行

初出：「中央公論」

1955（昭和30）年4月15日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-

86) を、大振りにつくっています。

入力：Nana ohbe

校正：酒井裕二

2015年6月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青い絨毯

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>